

三河アララギ

平成二十三年

二月号

第五十八卷 第二号



ニューヨーク日記(52) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

August 23, 2010 : L'Atelier de J el Robuchon

Blue Shoe Diaries



お友達がNYのラテリエ・ドゥ・ジョエル・ロブションでスーシェフのお仕事を始めました！早速遊びに食べに行ってきましたよ！色々な季節に合った美味しいもの沢山！暫く前に行った時も素敵なディナーでご機嫌だったけどお友達が居るとまた違う楽しみが加わって楽し

さ2倍！もう食べれないって思うくらい食べているのにやっぱりデザートは別腹。自分からあまりオーダーしなさそうなデザートを進められて頼んでみたらこんなに面白いデザートが出て来たよ！それに美味しいの！黄色い綿菓子はバナナの味！それと一緒にチョコレートムース。楽しい締めくくりでニコニコしながら家に帰りました。

Our friend started working at L'Atelier de J el Robuchon as a sous chef! So what's a friend to do than immediately go eat at the restaurant? ☺ It's been a while since ShoeLady and I went to eat here and had a fabulous dinner. This time around, it was just as exciting and fabulous with an added perk of going to see a friend do what she does best! We had so much to eat, all seasonal and wonderful. Just when I thought I couldn't take another bite, it was dessert time and magically, there is room in my stomach. I took the suggestion of the server and ordered L'Banane. Not something I might naturally order. Out came this fun cloud of yellow! It was banana cotton candy! Loved it! in the center was chocolate mousse with a cute butterfly perched on top. It was a very nice end to a dinner and it put a youthful hop in my step when going home.

目次

第五十八卷第二号(通卷六八六号)

表紙(白椿)	今泉 由利(1)	幾千万の	山口千恵子(25)
ニューヨーク日記(52)	Bire Shoe(2)	はるか金星	小野可南子(26)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「フボタンの窓」より	(4)	冬の生き物	夏目 勝弘(27)
歌集・本の木	杉浦 弘(5)	通勤電車	秋山 逸穂(28)
昼日光	岡本八千代(6)	サイレン	井村 喬泉(28)
餅つき	白井 久吉(7)	ことよせ	いーはとぶ(29)
ひとつ窓	今泉 由利(8)	投稿	伊藤 忠男(29)
ユトリ口展	伊藤八重子(9)	俳句	白井 信昭(29)
ひととせ	安藤 和代(10)		植村 公女(30)
母	弓谷 久子(11)		一石(30)
落葉	林 伊佐子(12)		喜仙(31)
目標の	青木 玉枝(13)		皓一(31)
雪便り	胃甲 節子(14)		編集部(32)
峰屋柿	佐々木利幸(15)	伊藤八重子歌集「えにし」より	(32)
浮雲	内藤 志げ(16)	贈呈誌 十二月号	(33)
寅歳の師走	近藤 映子(17)	私の一首	(34)
好みでありし	半田うめ子(18)	和歌から派生した季語の本意(その七)	佐藤 喜仙(35)
双子座流星群	金津 文枝(19)	物理学者と詩歌の世界(13)	一石(36)
足助もみじの香風溪	清澤 範子(20)	鎌田敬止という人(五〇)	鮫島 満(38)
メモリーの中	北川 宏廸(21)	絹の話(2)	今泉 雅勝(40)
最終章	杉浦恵美子(22)	「氷魚」のことから(12)	岡本八千代(41)
花柚	堀川 勝子(23)	ことのはスケッチ(38)	今泉 由利(42)
統一	平松 裕子(24)	和菓子街道(52)	平松 温子(43)
		お知らせ・編集後記・三河アララギ規程	(44)

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集 「ノボタンの窓」より

浜えんどうの濃き紫の路ひとすじここに残りて我一人ゆく

P
153

石巻も多米も低山雲とちて老耄三人いひつかるるに

P
154

歌集 一本の木

杉浦 弘

きそひつつ萌ゆる庭木にまじりゐてかたくなに芽吹かぬ棗一本

竹の秋まだ終らねばたかむらにみどりにほひてのぶる今年竹

あをあをと澄み透りたる夏空に薄氷のごとき昼の月浮く

昼日光 ひるひかげ

蒲郡 岡本八千代

雨あがりけふの冬至の昼日光 ひるひかげときどき淡くなりつつさし来

一年中に一番短き昼日光 かかげわれに今年もめぐり来しかな

思ひたちて冬至祭のかぼちゃ寺につひに来たれり今年は夫と

かぼちゃ寺の南瓜のアーチの滅罪門になぜか今年は自づとくぐらず

けふの日の幡豆観音様に何祈る夫は夫なりわれはわれなり

一つ二つ寺の石段下りたれば目の前に冬至のぎらぎらの海

ぎらぎらの磯海の中に海鳥のあまた群れつつ浮かびゆれつつ

文明の宿りし宿はここかとも思ひつつ通る民宿屋の前

「正岡子規」「斉藤茂吉」を注文す電話の手もとまで冬至の日さし

ちぢみ咲くノボタンの花の紫もいつしかこの目に見えなくなりつつ

餅つき

新城 白井久吉

やうやくに身体からだの調子回復し三度の食事待つほどになる

半数は入れ歯なれども沢庵も煮豆も硬き煎餅も嚙む

十二月四日に蒔えんどうきし豌豆は三週間過ぎて発芽し始むる

葉の落ちて血液循環図の如きケヤキ大樹に月は輝く

正月の餅つきは手伝ひ多ければわれはかまどの番をするのみ

餅つきも今はおほかた機械にてきねの音など聴くは少なし

暖かき日射のあれば目立ざる枇杷の花にも蜂の遊べり

年寄りの歩み方なりと言はれても事実であればむしろ喜ぶ

寝たきりの病人でなく一先づは安心をして手を握り合ふ

妹の手は指太く皺深く冷たきわれの手より冷えをり

ひとつ窓

東京 今 泉 由 利

もう何も怖くはないと思うまでシャンパンを飲む飛行機中

高い高い空にをりたり水平飛行深く深く人の思ほゆ

白くなる物みな雪に白くなるイエローキャブも白白きキャブ

マンハッタンを埋め尽くすかと降る雪の一粒だになし同じ結晶

天も地も東西南北秩序なし渦巻く逆巻く荒らあらぐる雪

幾何学的超高層的建築群この空間は雪降り荒るる

ニューヨークにはニューヨークの匂ひあり匂ひ動かし私の雑煮

Tシャツで過ごしてをりぬニューヨークひと日ひと度出でゆき零下

○△□基本の形にそそり立つマンハッタンのひとつの窓に

生か死かその接点に今は居る離陸態勢私の飛行機

ユトリ口展

豊川 伊藤八重子

車椅子の吾巡りたりユトリ口のモンマルトルの白き絵画を

欧州の風景描きしユトリ口の昏き街の画雪の街の画

えも言はれぬ感動をわが裡に秘め出で来し街に師走の風受く

馴染みなきヨーロッパの風景画眼まなこに残るユトリ口の白

細々と詠みし「えにし」を懐に画を描く友に逢ひたくてゆく

こつこつと松の葉を摘む脚立の子は初冬の光に包まれながら

ときじくの高砂子百合の咲く庭に郵便受の音をききたり

門脇に仄かに匂ふ柊の花に寄りゆく歳晚としぐれとなる

清潔なる明るきホーム広々しわが身を此処に置き替へてみる

その母を施設に送りし息子この心翳る横顔わがみのがさず

ひとつとせ

豊川 安藤 和代

嫁の亡きこのひとつとせの悲しみはたとふるものなく告ぐる人なし
琴の糸一本切れし思ひして一周忌すむ庭に佇む

法事客帰りて広き部屋に座すこの淋しさを何にたとえむ
ひとつとせは夢の如くに過ぎ行きて茜に染まる雲の流るる

真夜に目覚む会ひたさ胸にあふれきて嫁の名前をそつと呼びみる
花好きな嫁を思ひて庭いっぱい花植ゑたれど心満さず

嫁を呼ぶ吾がその声で目覚めたりふとんの衿の冷えにふるるも
吹く風も鳥のさえざり咲く花も命日にして悲しみのわく

草抜けば水仙の芽のつくつくと嫁の植ゑたるがゆへにせつなし
高圧線うならせ通る北の風帰宅の遅き孫を案ずる

母

豊川 弓 谷 久 子

亡き母の今日は生れし日母の齡何時しか越えて我は生き繼ぐ

耐える事のみ的一生と誦まれをり手元に残る母の短冊

今も我の小さき誇り老人会の副会長を務めぬし母

子に頼り暮し来し日を思ひ知る今日より暫し一人の暮し

幼なきままのみさとが我の内にて聞きそびれたり志望高校

漢字百選最後の難問にさしかかる漢検二級のみさとに負けじ

退院の娘と湯浴む冬至の夜柚子は無けれどしんから温し

明日より日射しが少しづつ伸びる心がなごむ只それだけで

薄紙を剥ぐ様に恢復して行かむ母の言葉なりし我も子に言ふ

自分の生活を歌ふのですよと諭されし三十年前の声の残りて

落葉

岡崎 林 伊 佐 子

雑木の落葉ちり敷く山の家日没もつとも早き日の暮れ

剪定の梅の木枇杷の木もやしたりいずれか分らぬひと嵩の灰

にぎはしく又散りやすき山茶花の花弁あさあさ夫は掃きをり

種まきて育てし野菜の収穫を一人暮らしの媪に分配

言葉なく独り草取るひねもすを畑の虫たちなぐさめとして

十二月の上賀茂神社に女の孫の結婚祝ふ吉事うれしき

記念にと上賀茂神社の松毬をひとつ拾ひて書棚にかざる

二条城の部屋広くしてうす暗き徳川慶喜の盛時をしのぶ

二条城のしるべに立てる三ヶ国の説明文よむ外人団体は

朝な夕な玄関にぎわし孫たちのスニーカー並ぶ同居の喜び

目標の

伊丹 青木 玉枝

杖を手に一歩一歩とポストまで急げぬわが背に大粒の雨

目標の米寿をやつと生き越してこの先授かる命は尊し

老いなれば哀しとのみは思はざり冬の暮色にいつか同化し

枯れ草に溜れる夕陽遠く見つ明日があることただただうれし

暖冬に慣れぬし日びに寒波来て今日は初雪冬空仰ぐ

雲間より日差し受くれればひとときを居間のシクラメンくれなるに燃ゆ

眼鏡の前に虫めがねを重ねつつ鬱という字のむつかしい字

すこやかに定年迎へし子の姿しばらくは安らにのんびりせよと

今日の日の十二時迄にあと五分今日の無事を喜び眠らむ

ベランダに吊した柿が皺目立ち何時の間にか飴色となる

雪便り

豊橋 胃 甲 節 子

小麦の芽出揃ふ田の路風の路一人歩みぬ杖恃みつつ

風強き朝のドア押す吹き溜る大小数多木の葉さまざま

強烈な眩暈の後は危なくて散歩に出でずシャンプーもせず

雪便りなども聞きつつ気忙はしき思ひのみにて無為に過ぎ行く

駆け抜けて行くかと思ふ十二月鶉は千両の実狙ひて離れず

大豆畑は収穫遅れて待ち切れず弾けて莢の中より零るる

散歩道焼かるる畑の本草中ピーマンの緑が赤く熟れゆく

父母のみ墓に詣でる事も無く過ぎて平安などある筈も無し

松山の駅に下り立つ嬉しさの再びは無き吾が身を歎く

渋抜きし柿の皮むく楽しみを友は今年もお裾分け下さる

峰屋柿

豊橋 佐々木利幸

携帯を第一として購入したり重量が軽きズームレンズ一つ
防寒着にと我は雨合羽を携へたり底冷えがする今朝の寒さに
幾度か東栄町地図を広げつつ撮影に來たり明神の裾に
蔦の測を我は三河なるナイヤガラと思ひながら幾枚も撮る
美濃判なる日めくりを幾枚か捲り取りたり臨書せむとて
筆使ひが強靱に見ゆる風信帖を昨夜も今夜も臨書をしたり
昼前は柿を剪り終へ昼からはポア口探偵を今日も読み居り
三本をノルマとす柿の剪定を怠る日も勤しむ日も
八本を残して置きたり元且も柿の剪定を勤しまむと
子規大人が好みて喰ひたる蜂屋柿を紐解き居り果実の事典に

浮雲

豊川 内藤 志げ

放水路の狭き浅瀬の浮雲をたまゆら見たり車を走らす

鎌を手に腰を伸してわが頭上茜の雲を暫し見上ぐる

見晴らせる雲は茜に明るみぬ後暫くは葱畑の草取る

白き月黄に変わりて中空に葱畑の草取りお終しまひにせむ

人参の畑に一つ落花生鳥と云はるる忘れ物なり

朝の陽に雄々しきかな本宮山中腹ほどに紅葉する見ゆ

藪下の溝よりつと翔び立てりわれは驚くこ鷺も驚く

朱き実を求めて廻る店内の棚に目立たぬ百両の一鉢

鉢植ゑの梅に蕾の白の見ゆ喜寿となられる天皇誕生日の朝

西風に向かひて一輪凍えそう今年終りの高砂百合が

寅歳の師走

名古屋 近藤映子

我夫の教え子達の見舞ひ花アマリリスポットに水そそぐ

教え子の見舞ひに夫は大き目を開きて自己紹介を見聞きをり

早や六年の過ぎ行く師走教え子五人のお見舞の嬉しく

我夫の発熱も早や治まりて握手の力何時もと変らず

我夫の右手温たかきは週二度のリハビリ後の柔らかき手を

吾の手をしっかりと握る夫の右手リハビリの後と思ひて握手

この師走皆既日食始まりし月にかくれし太陽の姿よ

此の年も残りわずか十日余り夫と握手をしつつ話しぬ

我夫の左手握手吾とせばしっかりと強く何時迄も手離さず

お父さんまだまだ大事と言い続け夫の左手握手する

好みでありし

新城 半田うめ子

行き暮れて千種の森にて義母と二人一夜を過ぎしき思ひ出すなり

わが父の土地でありたり国道ぞひ多くを取られ淋しかりけり

わが父の好みでありしびわの木の数本ありき伐られてしまひぬ

初めての豊田にて一泊しやさしき孫二人出費をしたり

上空へ舞ひて行くなり白さは西川の上をゆうゆうとして

西川の川辺に居りたりいたちの子親は死にたり殺虫剤かけられ

今年又万両の実の数多にて楽しみて眺むわが畑にて

とろろ芋掘らむかと思ひ鍬をもち手のしびれ来てあきらめたりき

我の呼ぶ声にて猫は走り来る二階より二匹やさしかりけり

双子座流星群

島根 金津 文枝

明日には雪降る予報星空に双子座流星群の流星サーと横切る

午後遅く二十三時の星空を双子座流星群の流星がサーと見え消えた

チンパンジーは葱を食べ風邪予防に人間も食べなさいと医師は言ふ

東京に住む従姉妹より人参南瓜胡麻牛蒡入りのキヤラメルが届く

茶話会に二年間来し福祉学生就職決まりしとクリスマスケーキ持参

結婚式の紙吹雪を掃く教会の聖歌隊の人々笑顔をもちて

こんもりと雪冠り南天と柗赤い実ぎつしり何鳥か頻りに食べる

雪かむる木に胸毛茶色の濃き鳥はヤマガラか美しさに心踊る

わが庭のコンクリートに血痕を残したる猫は子猫産みしか

野良猫も犬も雌はメンスあり飼主は言ふ初めての話

足助もみじの香嵐溪
春日井 清澤 範子

風もなく最終電車の音もなく午前〇時眠られずをり

園芸店の広告にある紅白の葉ぼたん植ゑて師走の準備

車にて吾を医院に送り来て手を握りくるる娘のやさしさ

吾が郷の足助もみじの香嵐溪新聞の写真に赤き待月橋

吾が庭に立ち出でて見れば茜雲が日本の形に流れ浮きをり

紅く変る堤防の桜の葉の中より鳩飛びたてり羽音立てつつ

嫁ぐより仕事選びし吾が娘休日は車にて米運びくるる

この夏は水枯れる程暑くして秋大根も播かず淋しも

薬を飲み足腰重く頻尿も副作用とて医師は言ふなり

吾が夫が美味しと言ひて飲む汁は人參と豆腐のとろろこぶ入り

メモリーの中

東京 北川 宏 廼

五七五の俳句・短歌の形式はリーマン予想の素数の分布か

リーマンの素数分布を肴にし日本酒二合が三合となる

天空の星の動きはニュートンのわれのからだは量子の力学

この一年のわれの姿はデジカメの一ギガバイトのメモリーの中

行間を読むといふときメールでは絵文字の顔色窺ふのかな

紙の本は消ゆることなしさはされど電子書籍は新しき本

あるときは防空頭巾をもち歩き今の若きはケータイをもつ

一日はパジャマのままにそおっと起き円・ドル相場をのぞくことから

朝起きてこなす手順の一つつつ昨日のごとく今日もはじまる

バス停に並ぶ老若列詰めず不思議な距離を保ちて並ぶ

最終章

蒲郡 杉浦恵美子

晩秋の西陽傾き生徒等のひよろひよろ長き影法師かな

二学期間掛けて学びし『舞姫』も今最終章の頁に入りぬ

『舞姫』の結末生徒等しんとして我が朗読の声のみ通る

擬古文も生徒等以外に理解せり『舞姫』悲劇に思ひ馳するか

醍醐味と蔗を嚙む境とを教へつつ今知り得たり深き言の葉

感謝状はノート破りて書いてあり授業の合間に作りしものか

早朝に家を出づれば初時雨土の匂ひを立ち昇らせぬ

我が残りの授業も数へれば百を切る伝ふることの難しさ楽しさ

この子等は漸く古典の面白さ知り始めたり最後の最後に

三年間共に過せば全ての子愛しく思ふ生意気なれど

花 柚

豊川 堀川 勝子

しゆるしゆると菓缶に滾る湯気の音聞きつつひとり更けゆく部屋に

冬至まであと幾日かと思ひつつ照り葉に籠る柚の実数ふ

ただきて温み残れる花柚を冬日差し込む仏間に供ふ

枯れ枝か剪れば穂先にぽっぽと朱き冬芽の畑の紅梅

柿落葉積み積む木下の日溜まりに蒟蒻玉のゆるゆると肥ゆ

冬日差す午後の厨に取り込みてポカポカ温き下着をたたむ

晩秋の日差しに白き蝶一つキャベツの畦より離れて行かず

浜風に吹かれて乾く古里の媪の芋切りみな旨かりし

軒先に夕べのひかり澄み透り芋切りつやつや仕上がりにつけり

裸木の木下明るく陽の射して在来水仙の瑞々みどり

統一

一

豊川 平松裕子

三河弁とおぼしき会話の聞こえ来る京都市内循環バスの中
雪混じりの雨に濡れゐる道走るバックミラーに夕日を見つつ
ひとしきりの雨に洗はれしビルの窓夕日赤々照り返しをり
返り咲きの立波草の紫のけなげにも見ゆ冬枯れの庭
凍みつきて萎るる大葉のダチュラ切る未だ蕾の数多残るも
色の統一ジャンルの統一我の好み思ひ巡らしウィンドー飾る
イスの上に笑ひ転げる笑ひ猫スイッチを切りし後の静もり
大晦の朝の空に白く細く消え入るばかりの下弦の月の
ヘッドライトを灯して国坂の峠越ゆ家に待つ人ありやなしや
ヘッドライトの中を横切れる黒き影二頭の鹿の畑に入りゆく

幾千万の

豊川 山口千恵子

地模様の藍色濃きは疑はしと客と君とのやりとり聞きゐる

水指を前に客をあしらへる小さき骨董店の主の君は

今宵より給湯温度一℃上げ手足のばして湯船に浸かる

短かき間に太く育ちし大根を土より抜きとる黒土つきくる

丸まりてつひの住処とゐるものを摘み出したり葉の間より

花畑に湿れる黒土おびただし今年初めて土龍の塚は

葉の落ちし畑の大豆扱ぎてゆく幾千万の粒ひそみこもれる

扱ぎとりし大豆を藁に束ねゆくとき折莢より黄の粒土に

冬の日に拵げ干したる大豆の束莢はじけつつ零るる豆粒

晩秋の畑に植ゑゆく細き苗冬を越ゆれば丸まる玉葱

はるか金星

豊川 小野可南子

白々と呆けすすきの靡くところ連れ合ふ人の無くてひとり

アイスランド火山の噴煙それ故に赤々と見ゆ今宵の満月

しき降るに又風さえも加わりて雨夜の更けを寝ねがたきかな

この朝のこの刻をして「あかつき」は金星直に写しているや

狭庭辺の落葉掃きつつある私思ひはつなぐはるか金星

日に増してドウダンツツジのくれなるよ山門みぎりのこの朝の道

地に低く花は黄きの色深き黄月見草と歌ひたまへる

ひとつ目の鐘のひびきに連れ合ひぬ向ふ三軒両隣びと

華やかに今宵本堂のお荘嚴坐しよつじんして新年迎ふ菩提寺

篝火の向ふにチラチラ白き粒小さき雪の降りはじめたり

冬の生き物

豊川 夏目勝弘

ひしがれて薄くうすきカマキリに霜月の雨ただに降りつく

舗装路の温もり恋ひしかモゾモゾと黒き毛虫の集まりて来る

枯れ色となりし堤の草むらより灰色バツタの短かき飛翔

庭石に休む私の足下を白き物くはへ黒アリのろり

白き物くはへ巢へと行くアリのひたすらの歩みしばし目に追ふ

庭松の高きに今年の早贄の蛙かかれり葉先の四とこ

青黒くなりて乾涸びし雨蛙かかれる松の枝切り落す

松の葉に生み付けられし毛虫の卵みつけ見つけ切り落しゆく

松の葉を好める毛虫人間は強き酒なし飲みて楽しむ

庭木々の低きを忙はしく移りゆく今年も先づジョウビタキの牝

「招待」

通勤電車

秋山逸穂

野の道に枯れゆくはこべに朝日さし石まじる土足裏にやさし
白白と朝霧のたつ川原を瀬音にむかい歩みゆくなり
寒かぜに提灯赤くゆれており手招きされているごとく見ゆ
あんこうの抜き文字白き藍染の幟音たて揺れているなり
きゆうくつな姿勢のままにもまれつつ通勤電車に今日も乗りおり

サイレン

井村喬泉

空地にて犬は尿まく汚水管と書かれしキャップを黄色に染めて
偏差値のことなどかつて話したる友と今夜は年金を語る
ひとりのみ取り残されてゆく焦り信号待ちつつ級友思ふ
電動の車椅子にて踏切を渡る人る鳴呼せかすなよ赤きサイレン
金槌を打ち付けるやうなサイレンに少し遅れて遮断機降りぬ

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

競ひあひ赤きつぶら実拾ひをり吾とをさなと花水木の下

三田美奈子

我が友の創りくれたるさをり織このパールが衿元ぬくし

稲吉友江

ふりつづく時雨の雨のままに暮るる若きこの友としばし語らふ

鈴木美耶子

もみじせしこの鉢植の風知草朝日の中にその黄深し

吉見幸子

新しき宇治橋の欄干にもたれ佇つわれにただよふこの木のかほり

牧原正枝

豊橋の路面電車の軋む音八十余年の今も走りつつ

岩瀬信子

「投稿」

半月に雲かかりいてちらほらと雪舞う空に願う明日を

伊藤忠男

師走には師走らしさを求めいてほっとするような今朝の冷え込み

コート着るタイミングさえ掴めないいつから冬か迷う朝なり

大楠は師走の風に大揺れて青実散らばふみ社境内

白井信昭

海鷗の群わが直上をゆくときの哀しき声を忘れずにゐる

退職日明日となりて役員室コーヒー一杯に話はずめり

「俳句」

身のうちを確かむ旅や花八手

植村公女

柚子湯して夢の中までかぎろえり

漢方の胃薬の甘し漱石忌

過去なるはセピア色なり秋深し

一石

人恋しストープ列車の北の旅

山眠るシリウス1つ輝いて

新劇のマチネーはねて日短^{ひーみじか}

喜仙

小晦日仕事納めの酒うまし^{こつごもり}

一升の酒を買ひたる年用意

一鍬に腰を伸せり冬日和

皓一

亡き友に別れを告げて冬コート

背伸して寿命想ふや実千両

伊藤八重子歌集「えにし」より

膝を折り土に坐りて草引けば無心となれる地の恵みに

山口千恵子

父よりも母よりも長き縁かとふたり草とる秋の日の庭

ご家族に囲まれて充実した豊かなお暮らしが伝わってきて、ほのほのとした気持になりました。

蜜柑畑の日向の草に低く咲く冬のたんぽぽ吾を励ます

小野可南子

思ほえず桃色ほつぺに口づけしその児も二十歳いま誰おもふ

あぜ道に咲く小さな野の花にも心を寄せ、そして成長したお孫さんへの思い、私にも身近に感じられるお歌、私への応援歌とも思つて選ばせていただきます。

行きつけば昔の母が待つらんか陸蒸気にて行く明治村

平松裕子

スカートに待針打ちて丈直すわが手に縫ひしけふを足らへる

気負いのないお歌ばかりで読んでいてやすらぎすら感じます。「えにし」ある人々に対する伊藤さんの感謝の思いが短い言葉の中に溢れ、歌集全体には包み切れない程の愛を感じました。

贈呈誌 十二月号

「冬雷」

長尾弘子

屋敷林にムクドリの子来て柿の実に鳴き交わしつづらさがりおり

「秋楡」

木村郁子

「柵」

塩見 瞳

せせらぎも夏のひとひも沈みいる湖^{うみ}への道にいくつトンネル

トンネル出で刈田のなかに弧を描く高速道路の巨き橋桁

「愛媛アララギ」

渡部 秋子

「群山」

泉多恵子

稲架ときて丸太ころがる棚田の畦葎白々と花のさゆらぐ

どこまでも続く湿原の彼方よりカッコウの声伸びやかに響く

「鹿児島アララギ」

平城 エミ

「檜の木」

田中とき

収穫の終りし大地見はるかす果てまで続く一筋の道

ひこばえの青々萌える広き田に白鷺一羽首伸ばし動かず

「滋賀アララギ」

新沼せつ子

「穂の原」

大谷登美子

空ややに高くなりしかと見上げたり九月暑さのなほ衰へず

満満と流るるモルダウを前にしてスメタナの曲を思はず歌ふ

「高知アララギ」

沢村多美

神谷叔子

沈下橋に行き遇ふ自転車^{しまん}の媪言ふこの四万十川の怒れるときを

戯れる幼子の声と熟れし柿つつみて優し小春日和は

「灯」

加藤 智子

今村たかの

里芋の葉おもての塵丸め込み雨滴ころころ転がり落ちる

ひざ悪くなりし吾は広びろき畑をめぐるも杖を頼りて

私の一首

白桃の一つさながら絵にも描き君への礼状今夜は書かむ

岡本八千代

「君への礼状」の「君」というのは、今年還暦を迎える或る男の人である。——その人は、かつて私が小学一年生の担任をした時の生徒である。この秋、彼から桃の一箱が送られてきた。

一つ手にとれば、何と美しい淡い桃色か。とっさに、この桃を描き、礼状を出したい気持になった。「さながら」は、このうれしさを絵に描くことばとして歌ってみた。白桃は「しらもも」と読みたい。

日に一度母と息子が顔合はず無口の出会いひにっこり微笑む

北川 宏 廸

昨年十一月、肺炎を拗らせ入院した母は退院後親友が奨める名古屋の老人ホームに入った。以来、妻の助けで東京と名古屋が半々の日が続いている。今ではこの生活にすっかり馴染み、母と分かち幸せな一時になっている。

母らしく余り話をするわけではないが、母が私をどう見ていたのか、母から洩れる言葉の端々におやと思うことがしばしばだ。有難いことに、母は私の三河アララギの一番の愛読者なのだ。

介護など受けぬやうにテレビにて体操をす足腰揃はず

伊与田 広子

体操と云へば学生時代より不得意で卒業後余りやったこともなく、体を動かさなくては老化すると云うので、やって見ただけで、老いて益々テレビに合わせるようにも、ちぐはぐになってしまふ。広場に集まってやっている人達は私の年令からして子や孫位の人達ばかり、あの集りの中に入っては体操やったら皆の笑い者になると思いつつやってみるが疲れてしまい途中でダウンしてしまった。でも毎日続けなければ効果は出ないと思っている。

和歌から派生した季語の本意（その七）

「笹」 佐藤喜仙

18 冴返る（寒返る・寒もどり）

「しぐれつる宵の村雲冴えかへり更け行く風に霰降るなり」

藤原家隆（新後拾遺集）

「さえかへり山風あるる常磐木に降りもたまらぬ春の沫雪」

藤原為家（玉葉集）

家隆の歌では冴返るは「澄みきる」意として詠まれており、冬の歌である。新古今時代には必ずしも春の季語と決まっていなかったようである。為家の歌になると「春の沫雪」と詠み込まれていて、あきらかに春の季感を表わしている。

例句

冴え返り冴え返りつ、春なかば

泊雲

衰へしいのちを張れば冴返る

草城

冴え返るものひとつに夜の鼻

楸邨

19 山焼（野火・草焼く・焼山・焼野）

「おもしろき野をばな焼きそ若草のつまも籠れりわれも籠れり」

詠人知らず（万葉集）

「春日野は今日はな焼きそ若草のつまも籠れりわれも籠れり」

詠人知らず（古今集）

春先に風のない日に山焼・野焼は行われる。

万葉集の時代より行われているが、多分に焼畑農業の為でありその灰を肥料とし、又害虫駆除の効果があつた。現代では山林保護の立場から山焼はあまり行われていないようであるが、野焼は各地で行われている。阿蘇の草千里の野焼きその規模の大きさと有名である。

例句

山焼の柱に映つる庵かな

青々

山火燃ゆ乾坤の闇ゆるぎなし

しづの女

野火消ゆる如くに想ひ惚む日あり

さくの

20 下萌（萌・草萌）

「春日野の下萌えわたる草の上につれなく見ゆる春の泡雪」

源国信（新古今集）

「春日野の草葉はやくと見えなくに下もえわたる春の早蕨」

藤原公実（新古今集）

草の芽の土に萌え出ることである。つまり草や木に何の差別もなく春に青々と生い出ずるものを云い、冬枯の地面のそここから、野にも園にも、道の傍、垣根のひま、岩のはざまなどと思わぬところにも、萌え出た草木の青々とした様を表出している。

例句

下萌もいまだ那須野のさむさかな

惟然

野の草となりはて蛇の目草萌ゆる

青邨

草萌や並び座るに足らぬほど

翔

物理学者と詩歌の世界 (13) — P.A.M. デイラック

一石

ポール・エイドリアン・モーリス・デイラック (Paul Arrien Maurice Dirac, 1902-1984) はイギリスの理論物理学者。プリンストル大学とケンブリッジ大学を卒業。ケンブリッジ大学ルーカス記念講座(数学)教授。1933年にシユレーディングガー(参考資料1)と共にノーベル物理学賞を受賞した(参考資料2)。

デイラックは質問に対して「Yes, No, I don't know」の3種類の返答しかなかったという寡黙な人であった。同僚達は、ふざけて無口に関する単位を「デイラック単位」と呼び、その1単位とは1時間に1語あたり発するときであるとした。デイラックはE・ウィグナー(1963年ノーベル物理学賞受賞)の妹と結婚した。ウィグナーは若き日のR・ファインマン(参考資料3)をデイラックと対比して次のように評している。「He is a second Dirac, only this time human」(彼はデイラックの再来だが、今度は生身の人間だ)(参考資料4)。業績以外ほとんど世間に知られることがなかった天才の人間の側面を描いた伝記が最近出版された。(参考資料5、原題の「The Strangest Man (最高の変人)」とはN・ボア(参考資料6)がデイラックを指して言った言葉である。)

デイラックは量子力学及び量子電磁気学の基礎づけについて多くの重要な貢献をした。1926年にシユレーディングガーによって提案されていた波動力学とW・ハイゼンベルク(参考資料)によって定式化された行列力学との間の等価性を、シユレーディングガーとは独立に証明した。また、W・パウリの禁制原理を満す粒子の統計力学をE・フェルミとは独立に考察したことから、このような統計は現在フェルミ・デイラック統計と言われる。

1928年において量子力学の相対論を考慮して電子を記述する方程式(デイラック方程式)を提唱した。この方程式から導かれる電子の負エネルギー状態について「デイラックの海」と呼ばれる解釈を提案した。この解釈では電子の反粒子(陽電子)の存在を予言した。反粒子というのは「正」粒子と出会うと対消滅してエネルギーに変わってしまう粒子のことを言う。後に(1932年)陽電子は実験的に発見された。

彼は数学の分野にも大きな影響を与えた。彼の導入したデルタ関数は数学における超関数理論へと発展し、またデイラック方程式においてはスピノルなど新しい数学的概念を生み出した。また量子力学の枠内で磁荷を持つ粒子、磁気単極子(モノポール)の記述を考案したが、その考察は数学者によって独立に考えられていたファイバー束の数学と本質的に同一であった。

量子力学に関する著書『Principles of Quantum Mechanics』（参考資料7）は、名著と言われている。R・フaynマンはこの著書からヒントを得て経路積分を考案した。その他、『一般相対性理論』（東京図書）、『ディラック現代物理学講義』（筑摩書房）、『ヒルベルト空間のスピノル』（吉岡書店）などがある。

語り継がれているディラックの言葉は多くない。

○「物理の大部分と化学の全体を数学的に取り扱うために必要な基本的法則は完全にわかっている。これらの法則を適用すると複雑すぎて解くことのできない方程式に行き着いてしまう（ことだけが困難なのである。）」Proc. Roy. Soc. (London) 1123, 714 (1929)

○「A physical law must possess mathematical beauty.」（物理学の法則は数学的な美を備えていなければならない。）

○「科学の目的は分かり難い物事を単純に理解できるようにすること。」「詩」は単純な事柄を理解できないように述べることだ。両者は両立しない。」（R・オッペンハイマー（参考資料8）の詩への関心を皮肉って）

○「終わりを知らないで文は書き始めないことって学校で教わったよ」（N・ボーアが論文の結語をどうやって終わらせるか悩んでいるときに）

○「その女の子たちが素敵だって、どうして前もってわかるのかね。」（独身時代、W・ハイゼンベルク（参考資料9）と過ごした客船の中で、

「君はどうしてダンスするんだい？」とディラックは問う。ハイゼンベルクが「素敵な女の子たちがいるときには、ダンスするのは楽しいからだよ」と答えた時のディラックの言葉がこれである。）

参考資料

- 1) 三河アララギ、エルヴィン・シュレーディンガー、p 36、第57巻、第8号（2010）
- 2) フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』、ポール・ディラック。:http://en.wikipedia.org/wiki/Paul_Dirac
- 3) 三河アララギ、リチャード・フaynマン、p 36、第57巻、第12号（2010）
- 4) 『xよゆうならフaynマンさん』、パリテイ編集委員会編、丸善
- 5) G. Farnelo、'The Strangest Man: The Hidden Life of Paul Dirac: Quantum Genius』（『量子の海、ディラックの深淵』、早川書房）
- 6) 三河アララギ、ニールス・ボーア、p 36、第57巻、第10号（2010）
- 7) 『Principles of Quantum Mechanics』（『量子力学』、岩波書店）
- 8) 三河アララギ、ロバート・オッペンハイマー、p 36、第58巻、第1号（2011）
- 9) 三河アララギ、ヴェルナー・ハイゼンベルク、p 36、第57巻、第11号（2010）

鎌田敬止という人（五十）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（12）〉

その後、光太郎の追加原稿がなかなか届かないらしく、鎌田は、「智恵子抄の追加原稿心待ちにお待ちいたして居ります。」（昭和二十二年五月十九日付）とはがきを書いている。しかし、光太郎はこの頃、物資窮乏の時代に対する認識もあり、その心配を、「新聞などで見る様子では果して紙を入手して出版可能なものでせうか。心もとなき気がします。原稿送つても無駄になるやうな気がしてなりません。」（昭和二十二年五月二十六日付）と鎌田に書き送っている。この頃、日本はアメリカの占領下であり、原稿は検閲され、出版用紙の割り当ては内閣直属の委員会によって決定されており割り当て以外の用紙使用による出版は認められていなかった。光太郎はその用紙のことを案じていたのである。これに対して、鎌田は、

拝啓五月二十六日付のおハガキ只今忝く拝見いたしました。（中略）
私なりに自信は十分ございますから御懸念なく一日も早く玉稿お送り下さいますやうお願い申し上げます。決して出版不能といふやうな

事態は起しませんことを確信を以て申し上げます。そして用紙印刷製本等の点につきましては最善の力を尽しまして御高恩に酬いられるかと思つてをります。健康さへ許せば直ぐにも山口へ参上玉稿を戴いて帰りたいのですけれどまだ今の汽車では少し無理のやうですから手紙でお願い申あげます次第です。

（昭和二十二年五月三十日付）

と返事をし、さらに次に示すような催促の手紙を立て続けに書いてもいる。

もうすぐ著手いたしたいのですが、智恵子抄の原稿は未だ頂戴できませんでせうか。前にも申上げましたやうに智恵子抄を白玉書房の第一出版にさせて頂きたく毎日毎日鶴首してお待ちいたして居ります。大方畑の方がお忙しいのでお送り願へないでゐること存じますが、印刷所へは原稿を全部まとめて渡した方が進行上好都合ですから龍星閣版の原稿も渡さずにある次第であります。詩と後記（又は序文）至急お送り下さいますやう伏して懇願申し上げます。

（昭和二十二年六月一日付）

このような返事を読んだ光太郎の反応も早く、「おてがミをみて又原稿お送りする気になり、今日の雨を幸に清書しました、今郵便屋さんの時間が迫つてゐるので大急ぎで封をします。」（昭和二十二年六月

六日付)と書き送り、翌日には、

昨日速達で「智恵子抄」の原稿「松庵寺」及小文をお送りしました。詩は年代順に最後に入れて下さい。小文は序といふほどのものではないので、後記のやうにして下さい。校正は小生下手なのですべて貴下におまかせいたします。本の体裁は以前のに準じたらいいか、白玉書房として別に考へますか、御意見をおきかせ下さい。

(昭和二十二年六月七日付)

と、相当具体的な点にまで触れた手紙を書いている。このことは日記にも、「智恵子抄」への追加詩二篇清書。「報告」松庵寺。六月五日、「鎌田氏へテカミ書き」、「智恵子抄」の原稿発送(六月六日)と記している。光太郎からの原稿が届くまでの数日間にも鎌田は、

前便にてお願ひ申上げましたが智恵子抄の追加原稿何卒できるだけお早くお送り下さいますやうくれくれもお願ひ申上げます。(中略)決してあとから御心配おかけするやうな失態は起きない自信がありますから是非御送稿の程懇願申上げます。

(昭和二十二年六月九日付)

と重ねて催促している。原稿を送るところまで用意した光太郎は、親しい人への手紙にも、「智恵子抄」の重版にも詩を、「二加へます。」

(宮崎稔宛、六月四日付)、「白玉書房といふ出版所がそのうちに来るそこから『智恵子抄』の新しい版が九月か十月頃出る筈です。二、三篇追加しました。二篇とも花巻で書いたものです。」(梶澤ふみ子宛、六月三十日付)等とも知らせている。

光太郎の原稿は無事に届き、喜んだ鎌田は次のように礼状を書いている。

拝啓「智恵子抄」の玉稿忝く拝受いたしました。十日の日に、七日付のおハガキが先きにつき、その前日お出し下さったといふ速達便がなかなか届きませんので毎日気にしてゐましたところ今朝やうやく配達され、ほつとしました。有り難う存じました。これで愈々白玉書房も発足でき大変うれしく今日は雨降りであつとうしいお天氣ですけれど、一日気もちがうきうきしてゐます。二篇の詩も大きな深い愛情が溢れてゐてまことに見事ですが、こんなにも愛し愛されるといふことは殆どこの地上のものと思へぬ程であります。後記も澤田さんに対する温いお気持が出てゐて大さう結構です。詩は仰せの通り年代順に詩の最後へ、「記」は巻の終りに入れました。装幀は龍星閣版に準じて箱をカバーに変へる程度で如何でせう。カバーの紙も箱張のに似た和紙を探したいと思ひます。「造形美論」のカバーの紙ならなほ好いのではないでせうか。本の背は厚さによつて角にしたらどうでせうか。

(昭和二十二年六月二五日付)

絹の話 (2) 「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹はいつ、どんなきっかけで作られたのでしょうか。

戸外には糞虫や天蚕の様に大きな繭（野蚕）を作る虫はあまたいるにも係わらず、人々はクワコと言う桑の葉を食い荒らす小さな繭を選んで品種改良を重ねて、今日の白い繭を手にいれました（家蚕）。

繊維は土器の様に残らないので、はっきり確証は有りませんが、およそ5千年前中国で作られ始めたようです。今日でも東南アジアやアフリカなどでは繭の中の蛹は栄養豊富な大切な食料品で、食品マーケットで日常売られています。日本でも長野県などでは今日でも食べられています。

繭の中の蛹を取り出す事は、今日では鋭利な刃物が有るので簡単に繭を切つて蛹を取り出せますが、青銅器もない当時は大変困難であったようです。繭は簡単には切れないのです。繭を集めても10日もたつと蛾になって飛んで行ってしまいます。何とか食べようと繭ごと口に入れて嚙んでいた様です。

すると、口内の唾液と温度で繭を固めているにかわ質が解けて口から真綿を細く引き延ばした様になったり、時には目に見えないほど細い一本の糸になったりしてスルスルと出てくるのです。この事にヒン

トを得て湯の中に繭を入れて湯気と一緒に上がって来る細い一本の糸を巻取る事が出来る様になった様です。（当時の繭からは300m〜400m位、現代の繭からは1500m位の糸がとれます）

ところが広葉樹林の山野に多種多様生息する野蚕の繭は口で転がしたり、お湯に入れたくらいでは簡単にほぐれて糸になりません。もつと以前から野蚕はほぐしてつむぎ糸にして使われていたようですが、糸が茶、うすグリーン、ベイジュ等有色で、白と言う当時の需要にはかなわなかったと思われます。

一昨年豊橋丸栄でワイルドシルク展をしている時、年配のお客様が、白い繭を見て、なつかしそうに「子どもの頃繭を口に入れて糸を出して遊んだものです」と言われた時は歴史の彼方を思い出し、感銘を受けました。

一粒の繭から上げた一本を中国の殷の時代の甲骨文字には「忽」と書かれております、さらに5本束ねたものを「糸」、糸を二つ合わせた物を「絲」と表しています。（これが今日生糸とよばれる物です）糸を合わせて毛、毛を合わせて厩。

明治政府は絹を産業の中心に据えて立国するに当り、円以下の単位を絹糸の太さと同じ呼称にした事を思うと、明治の人々の高い教養と意気込みに感じ入る事しきりです。

「氷魚」のことから (121) 岡本八千代

もう、冬至である。なんとなくうれい。晷の目が一目一目くらいに日が長くなるなどといわれているからか。陰から陽に変わるからか。

そして、正月が来る。今年(二〇一一年)は兎年。正岡子規は兎年であった。子規が生まれたのは慶應三年(一八六七年)であるから、彼にとっては一二回目の兎年を迎えることになろうかと思う。(坪内稔典著「正岡子規の楽しむ力」参考)

さて、ここから、子規の小説「山吹の一枝」の先回のつづきを書いてゆく。

第二回 我は淡泊。 非風稿

医者の紀尾井三郎は、山西の令嬢に見染められたが、いとも淡泊に別れて、医を深めんとして江戸に行く。

第三回 人は書生 花ぬす人稿

今の世の中は書生の世の中。三人の書生が描かれる。

山尾―(子規) 深和―(非風)

主人公の紀尾井三郎―(五百木飄亭でモデルとされている)

そして、新海非風と、盗花(花ぬす人、つまり子規)この二人が交互に執筆した。この中で隠居としている人は飄亭のこと。

この小説は、「明治23年2月以降、俳誌の『ホトトギス』九巻一号の老梅居雑話(四)引用「言志集」による。」とされている。

第四回 下宿屋 非風稿

「本郷真砂町あたりのある坂の上に臨みて建てたる一の閑静なる下宿あり」目につくは紀尾井・山尾・深和の札名あり」…と三人の汚ない下宿屋のことと、青年らしい会話と笑いを中心。

第五回 柳橋 花ぬす人稿

三人の他、金田カナタと星崎、かつての同窓生の医生が登場。

柳橋といえ、東京の芸妓の街。ここで二人の芸者が登場。一人は奴という芸者、この人は姉さん格。今一人は小松芸者で十八・九歳とみられる。

第六回 忍か岡 非風稿

ここで、小松という若い美しい芸者と、山西の令嬢との三角関係が書かれている。紀尾井は、一通は柳橋小松よりの文、他の一通は山西マスの手紙をもち、「一心不乱と何かを考へをれるのみにて文よむのにもあらず 時々何か言ひつつ前に一歩進めば後に一歩退き、退きては進み何か決し兼ねる有様なり」と、紀尾井の苦しむ様子。――ふと気づくと車の中。しかも隣には友がいる。はつきりと自分を現実に気づかせたのは、そこは「忍か岡」であるのか。「不忍」はまだか？ 今のは夢か？ 友の答は「知らず」以下次回へ

ああ、TVでの「坂の上の雲」は、ついに子規の最期を上映した。このことも次回へ。

ことのはスケッチ (386)

今 泉 由 利

『細胞』

もつとも単純な生命は、「栄養を取り入れてエネルギーにかえ、子孫を増やすことが出来るもの」と定義される。

それは三つの要素からなり、「生命自身の情報分子 (DNA)」「さまざまな作業をする酵素 (タンパク質)」「生体分子をくるむ膜」。

細胞膜がシャボン玉と同じ原理で丸くなり、水中を漂い、栄養を取り込み、酵素で分解しエネルギーを得る。この生命細胞は、DNAを取り込むと急速に分裂をはじめ。

自己増殖中に突然な変異が起きることがあり、一つ一つの原始生命は個性をもつようになる。

単純な分子からはじまり、さまざまに分かれてゆき、今の地球の生物に至った。

ここまでわかればもう安心。宇宙のなかの異なる星の、異なる環境で、地球とは異なる姿の生命 (?) が存在するだろうことを、私は勝手に疑わない。

超新星の爆發ですら個性があるというし、まったく同じ人間はいないのであり、無限大と思う雪も、その結晶の一つ一つが異なるという。分子の次元でも、まったく同じというものはないのだと私の結論にする。

宇宙始まって以来、たった一つの存在の自分をもつともつと大切にしようと思う。

携帯電話のスイッチを切り、パソコンは持たず、メモ用紙、鉛筆、

毎日使っている手回りの品だけ携え、成田行のスカイライナーに乗った。

夕刻近い淡い空、車窓の左肩に、十四日月が付いてきてくれていた。結構寂しくなる。

空港で出国手続きをし、ニューヨーク直行便に乗る。何度繰り返したか数えきれないけれど、離陸する時は、これで死んでしまいかもしれない、と切なく思う。

生物は、基本的には生きるために生きているのであって、死は避けなければいけない。

怖いから、お酒の酔いで自分を誤魔化していて、我にかえると、飛行機の窓のやはり左肩、十四日だった月が十五日の円さになって、ニューヨークに着くまで一緒にいてくれるのだった。なんだか宇宙の一員になれたような気持になった。

宇宙船の停泊中のようなニューヨークの玉由と由野の家で、友人達が集まってきてくれて：外国で生きてきた自分を、沢山沢山思い出すのだった。

ニューヨークに雪が降りはじめた。どんどん積る。サラサラの雪だから、一度積ったのもまた巻きあげられ、吹きとばされ…。

超高層ビルのまん中辺りの窓にいて、降ってくる雪、降ってゆく雪。厭きず見ている。

林立し、聳え立つビルを吹きあげる風、吹き巻く風、天然では起り得ないだろう。目茶苦茶な風が吹き荒れ、雪も滅茶苦茶。雪が沢山降りすぎて、隣り合うビルさえ見えなくなった。

吹雪は次の日までけたたましく続き、ニューヨークはマヒした。一部始終を眺めていた。

和菓子街道 (52)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

宮宿から海路を七里(約27キロ)。桑名は城下町であり、東海道五十三次中42番目の宿場町、また良港を持つ町として栄えた。船着場跡の伊勢国一の鳥居に出迎えられ、伊勢路に足を踏み入れたことを実感する。

船を下りると…という設定は現代の旅人は体験できないが、江戸時代の人が味わった饅頭の味は、「とらや老舗」で求めることができる。宝永元(1704)年創業、現当主で11代目という県内屈指の老舗で、創業以来、「とらや饅頭」のみを、酒素から全て手作りで作り続けている。江戸時代末期の天保年間に、桑名藩士の渡部親子の間で交わされた交換日記にも、「今度、土産にとらや饅頭を持っていく」などと記されている饅頭だ。



ひとつ買って、近くの歴史公園で頬張った。すっきりとした甘さと酒素の香り…そうだ、一折買って土産にしよう。すぐに店に引き返した。

もち米と麴の酒素に小麦粉を混ぜて発酵させた生地に、餡を包んで蒸した「とらや饅頭」。

◆とらや老舗

住所：三重県桑名市本町54

電話：0594-22-0706

お知らせ

▽歌会を二月二十七日(第四日曜日)に、新年歌会として、午前十一時より、御津生涯学習会館(旧御津町中央公民館)にて行う。

※会費二千元

※詠草二首をハガキにて、二月二十四日(木)までに必着、郵送のこと。

▽三月号原稿は、二月一日(火)までに、必着、郵送のこと。

歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一一四・〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰め(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△明けましておめでとうございませう。平成二十三年となりました。会員の皆様にとつて今年が昨年より良い年となりますように。

年頭に当たつて何か目標を持たれましたか。一日一首の歌作を目標にするのも良いでしょうし、真剣に物事に向き合い、観察したり、考えたりする時間を持つのも良いでしょう。

今月号に、伊藤八重子さんが先頃上梓された「えにし」から編集員がひとり二首づつ掲載させて頂きました心に響く歌が多く二首を選ぶのに苦労致しました。掲載されなかった中にこんな歌がありました。

「まだ読みたきおもひが我に残りをり磯夫ダチユラは鉢に芽を吹く」老といふ自然に逆らい頬はたく生きある限りわが身励ます」

ひたすら前に進むとうとする姿が目に見えます。このように意欲的に歌作に取り組んでゆきたいと思えました。

△「私の一首」につきましては、今後歌稿と同じ送り先にお送り下さい。(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分三万円、一ヶ年分四千元とする。

◇退会の際は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十三年一月二十五日印刷 第五十八巻 第二号
平成二十三年二月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

発行人

平松 裕子・山口千恵子

発行所

今泉由利

URL

三河アララギ発行所 〒四四二・〇三二一
豊川市御津町御馬西三七
TEL (〇五三三)七五・二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇・六・五六三二九
E-mail yun88@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://maizumiyun.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美